

BAPTIST RAPPA

関西単立バプテスト神学校 校報  バプテストラッパ

12月6日(金)

神学校クリスマス祝会

詳細は裏面で!

夜

六時三〇分 神学生クリスマス劇上演
七時 神学校クリスマス賛美とメッセージ

朝

一〇時 神学校クリスマス賛美とメッセージ

Merry
Christmas



CONTENTS

校長コラム Baptist Voice 第15号 「あがないの歴史」
聖書語句の学びシリーズ第19回 「偶像」
神学校 News クリスマス祝会 屋根工事
支援感謝

冬号

2013

Vol. 119

BAPTIST VOICE

第15声 あがないの歴史

関西単立バプテスト神学校

校長コラム Baptist Voice15
村上 聡



二〇二〇年に、東京で、オリンピックが開催されることになりました。前回、東京でオリンピックが開催された一九六四年に生まれた私にとっては、感慨深いものがあります。その頃は、まだ戦後約二十年しか経過していませんでしたが、特別に豊かではなく、ごく一般的な家庭に生まれた私ですら、食べるものがなかったという経験をすることはありませんでした。本当にめざましい復興であったことが分かります。

しかし、一世代前の父や母からは、食べるものがなかった時代の話は何度も何度も聞かされ、幼い頃から、食べるものがあることに感謝をすることを教えられました。

時代の変化は本当に早いものです。食べるものが十分でない時代から、食べられる時代、そして、食料が十分に満たされると、今度は、グルメという言葉に象徴されるように、いかに美味しいものを食べるのか、その上、最近では、多少は美味しくなくても健康にいいもの、また豊かにあるのに、カロリーを取り過ぎないように、食べない時代へと変わってきました。自分が生きていく時代のことだけで、過去のことを知らない、恩恵に与っている今の状態が当たり前と思うものです。

しかし、過去を振り返り、その歴史を学ぶことで、現代がいかに恵まれているのかが分かります。昔は食べ物がなかったことが分かったら、自分の好きなものではなくても、感謝して頂かないと思おうのではないのでしょうか。

水も同じです。昔は、一日の多くの時間を費やして、水を水場までくみにいったと思いますが、



現代は、蛇口をひねるだけで、澄んだ水が、いつでも、でてきます。昔の人が、この蛇口を見たら、どれほど感嘆の声をあげるでしょうか。私たちは、これが、当たり前になっており、感謝をすることがないのではないのでしょうか。

この点においても、過去がどうであったかを振り返ると、神様から頂いている恩恵に気がつき、感謝をしなければならぬと思うようになるのです。

ですから同じように、ここで、あがないについても過去を振り返り、その歴史を考えてみたいと思います。

したがって、初めの契約も血なしに成立したのではありません。……また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。(ヘブル人への手紙九章)

ヘブル人への手紙は、旧約時代のあがないについて振り返っています。それは、旧約時代と新約時代のあがないを比較することで、今、私たちが、どれほど恵まれた環境に置かれているのか、気がつくからです。この一八節から二二節の間には、「血」という言葉が六回使われており、この「血」という言葉が、キーワードとなっているのは明らかです。そして、「罪を赦して頂くためには、血が必要である」と、時代や民族を越えて、絶対的で、不変な原則が述べられています。すなわち、旧約時代であっても、新約時代であっても、罪を赦して頂くためには、血が流されなければならない、これが著者の主張でした。

しかし、旧約時代に私たちの罪のために流されたのは、動物の血でした。著者の主張はこうです。「旧約時代は、人の罪のために、動物の血が流されてきました。家畜は、当時の一財産です。罪の赦しのために、富は減り、また時間を使って、幕屋や神殿まで行かなければなりません。そして祭司にお願いをして規定の手続きをしなければなりません。さらに、罪を犯せば、また同じ事を、何度もしなければなりません。旧約時代も、新約時代も、人が罪を赦して頂くと思えば、血が流されなければなりません。これは永遠に変わらない原則であることは、先程言った通りです。では、私たちは、今、動物の血を流していますか。具体的に赤い血を教会で見ましたか。それでは、どうして私たちは赦されているのでしょうか。」

また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によつて、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。(ヘブル人への手紙九章二二節)

「私たちは、現在、罪の赦しのために目に見えるかたちで赤い血が流されてはいません。それは、イエス様が、今から約二〇〇〇年前前に、十字架で血を流して下さったからです。それは、私たちの罪のためでした。」

今、もしイエス様の十字架の血がなければ、昔と同じように動物を身代わりとしてささげなければなりません。

イエス様は、ただ一度で、永遠のあがないを成し遂げられたのです。私たちは、そのことを信仰で受け止めて、イエス様を

信じて救われたのです。今、血を見ることはありませんが、血が流されていないのではありません。繰り返しますが、それは、過去にイエス様が、血を流して下さいたのです。」

罪が赦され、あがなわれるということは、本当は、大変な犠牲がいるのです。しかし、信仰で恵みを頂いた私たちは、自分で自分の罪のために何もしていませんから、また、実際に血を見ていませんから、罪のあがないの重さを感じることがなく、感謝を忘れることがあるのではないのでしょうか。しかし、本当は簡単なことではありませんでした。私たちは何もしなかったかもしれないませんが、その代わりにイエス様が、大きな犠牲を払われ、血を流されたのです。

食べるものがなかった時代があったことを知ると、今、食べられることに感謝が溢れます。好みのものがでてこなければ、不満に思うことが、いかに自己中心なことであるのかを省みることができません。昔は、一日の多くの時間を使って、水場に水を汲みに行ったことを知れば、蛇口をひねり、いつでも美しい水で手を洗えることに感謝が溢れるのではないのでしょうか。何故なら、それは本来、当たり前のことではなかったからです。今も昔も、罪が赦されるためには、血が必要です。昔の動物の血を身代わりとしてささげた歴史を学ぶと、現在、私たちが、信じるだけで、十字架で流された神のひとり子の尊い血の恩恵に与れることが、どれほど恵まれたことか分かるでしょう。

今、水場まで一日の多くの時間を使って汲みに行く必要がなくなりました。今、財産である家畜を犠牲にする必要も、そのために使う時間も必要ではなくなりました。しかし、そのために主が身代わりとなって下さったのなら、このクリスマスに溢れるばかりの感謝をささげていきましょう。そして蛇口をひねるだけで水がでたのですから、そのために必要だった多くの時間を、今度は主のために、心からささげていこうではありませんか。

Baptist Voice No.15

来年度入学生願書受付

詳細はお問い合わせ下さい。尚、面接は、二〇一四年三月一〇日の予定です

関西単立バプテスト神学校

growing together in Christ

since 1967

KIBBS



偶像

聖書語句の学びシリーズ 第19回
吉本隆史



前々回、前回と二回に渡って、真の神の本質を示す「御名」について学びましたが、今回は偽りの神である「偶像」について学びましょう。

I. 旧約聖書における「偶像」

A. 偶像に関する語彙

新改訳で「偶像」等に訳されている原語から、偶像の本質を学びましょう。

1. 人が造ったもの

「偶像、彫像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (出エジプト二〇・四、申命記四・一六等)と「彫像、刻んだ像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (申命記七・五、イザヤ一〇・一〇等)は、「彫る、切り取る」(𐤀𐤃𐤁𐤀)の名詞形です。

また「偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (Iサムエル三一・九等)と「偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (イザヤ四八・五)は、「形作る」(𐤀𐤃𐤁𐤀)の名詞形であり、「鑄た像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (イザヤ四一・二九等)と「鑄像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (イザヤ四二・一七等)は、「鑄る、(地金を)注ぐ」(𐤀𐤃𐤁𐤀)の名詞形です。

「偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (イザヤ四五・一六)も、「かたどる」(𐤀𐤃𐤁𐤀)の名詞形です。「偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (申命記二九・一七等)は、「丸太、(木や石の)大きな塊」の意味です。

このように偶像は、人間が造ったものですので、動くことも話すことも、災いや幸いを与えることもできません(エレミヤ一〇・二・五)。

2. 目に見えるもの

「像」(𐤀𐤃𐤁𐤀)は、一般的に「かたち」を意味し、「神のかたち」(創世記一・二六、二七等)にも、「偶像」(II列王記一一・一八等)にも使用されます。

「形、偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (申命記四・一六、エゼキエル八・三等)は、神性を表現したものとしての「形、像」を意味しています。偶像は、人が目に見えない神を形、像にしようとしたものと理解できます。

また、「石像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (民数記三三・五二等)は、「展示品、見えるもの、見られるもの」の意で、特に彫像を指します。

このように、偶像には、見えない神を見るようにする人間の意図が表れています。

3. むなしなもの

「偶像、偽りの神」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (レビ一九・四、イザヤ二・八等)は、「弱い、欠けている」を意味する語根から来ている言葉で、聖書では、むなしの礼拝対象、つまり世の神々を描写するのに用いられます。また、「偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (イザヤ六六・三等)には、「空虚なもの、無」(アモス五・五等)という意味があります。

このように、偶像は、本来存在しない神々を人が造り出したものですから、偽りの神であり、むなしなものなのです(イザヤ二・八)。

4. 忌むべきもの

右記の「偶像」(𐤀𐤃𐤁𐤀) (詩篇三六・三、四等)、(イザヤ五九・六、七等)、「不法」(詩篇三六・三、四等)、

「罪惡」(同五五・一〇等)、「わざわざい」(同九〇・一〇等)等の意味もあります。

また、偶像は、「忌みきらうべきもの」(☐トエーバー) (申命記七・二六等)、「忌むべきもの」(☐シクーツ) (同二九・一七等)、「忌まわしいもの」(☐ニダー) (II歴代誌二九・五等)と描写されています。

このように、偶像礼拝は、むなしただけでなく、不義、不法、罪惡、わざわざいであり、神が忌み嫌われることなのです。

B. 偶像礼拝の誤り

十戒の第二戒を初め、聖書では、繰り返し、偶像を造ること、偶像を拝むこと、偶像に仕えることが禁じられています(出エジプト二〇・四・六等)。それでは、どのような点で、偶像礼拝は誤っているのでしょうか。

1. 偶像の制作の誤り

異教の神々の像は論外ですが、真の神の像を表現するためであっても像を造るべきではありません(同三二・八)。目に見えないお方を目に見える形にしてはなりません(申命記四・一五・一九)。それは、無限の霊である神を、有限な物で表現することであり、創造主を被造物に引き下げることになります。

2. 礼拝の対象の誤り

偶像礼拝は、根源的には第一戒(同二〇・三)の違反であり、礼拝の対象が誤っています。生ける真の神のみが礼拝を受けるべきお方ですから、神以外のものを礼拝することは罪です。主は聖なる「ねたむ神」(☐エール・カナ) (同二〇・五等)であり、本来ご自身のものである栄光と主権を他のものに与えることを許されません(イザヤ四二・八、四八・一二)。

3. 礼拝の方法の誤り

人が神を礼拝するのを助けるために、象徴としての神の像を用いることも誤りです。それは、やがて神が像と同一視され、像自体が神、礼拝の対象になってしまいます。イスラエルは、見えない主の御座として造った金の小牛を拝みました(詩篇一〇六・一九・二〇)。そして、何よりも、物質によって霊である神を礼拝することはできないのです(ヨハネ四・二四)。

4. 悪霊に関する誤り

偶像礼拝は、悪霊と関係することでもあり(申命記三二・一七)、単なる形だけのものではないのです。ですから、私たちは、偶像をただの像として軽く見るのではなく、あらゆる形での偶像礼拝を退けるように致しましょう(ダニエル三章等)。

II. 新約聖書における「偶像」

A. 偶像に関する語彙

「偶像」(☐エイドロロン)は、「見る」(☐エイド)の派生語「(見える)形、姿」(☐エイドス)に由来し、新約では、「偶像」(Iコリント一二・二等)や「偶像の神」(同八・四等)を意味します。

古典ギリシャ語では、この「☐エイドロロン」は「形、姿、幻影」等を意味し「神々の像」という意味はなく、「☐アガッロー(飾る、栄光を与える、賛美する)」の名詞形「☐アガルマ(装い、飾り、宝石、像、彫像)」が使われます。七〇人訳が、力と現実性がない偶像を「☐アガルマ」ではなく、存在の喪失を示す「☐エイドロロン」を訳語として用いました。そして、新約もそれを継承しています。

その他、「偶像」(☐エイドロロン)の派生語の「偶像を礼拝する者」(☐エイドロラトリス) (Iコリント五・一〇等)、「偶像にささげた肉」(☐エイドロシュトン) (同八・一等)、「偶像の宮」(☐エイドレーオン)、「偶像礼拝」(☐エイドロラトリア) (同二〇・一四等)が、新約に用いられています。

B. 偶像に関する教え

1. 偶像礼拝の本質

「偶像」という言葉は出てこないのですが、ローマ人への手紙一章二一―二五節は、「偶像礼拝」の本質を教えています。

「神を知っていないながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず」という罪の本質が、「不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代え」、また「造り主の代わりに造られた物

神学校クリスマス祝会



12月6日金曜日

朝10時 / 夜7時



夜は6時30分より

神学生によるクリスマス劇がございますので是非お早めにお越し下さい。場所は神学校音楽室です。

学生教師による神学校聖歌隊

クリスマス聖書メッセージ  ダニエル・ガードナー先生

賛美と笑顔とそして聖書の祝福を…… 

2014年度より「通信制」が始まります

3年もしくは4年コースの入学者を対象に、その1年次のみ、実際に神学校クラスを録画した動画によって学ぶことが可能となります。詳しくはお問い合わせ下さい。

を拝み、これに仕える」という具体的な形で現れるのが、偶像礼拝です。

偶像礼拝は、創造主を認めない私たち日本人が、救われるまでは、その罪の大きさを最も理解しにくい罪と言えます。宣教の一面は、人々が「偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになること（1テサロニケ1・9）、真の礼拝者となること（ヨハネ4・23-24）を、目標とすることです。

2. 偶像礼拝と悪霊

偶像の神は人間が造り出したものであり、実際には存在しません（1コリント8・4-6）。しかし、それは偶像礼拝に霊的実体がないということではありません。旧約と同様、新約でも偶像礼拝は悪霊と関係することを教えています（同一0・19、20）。

ですから、私たちは、偶像に関して、あまりにも合理的に考えるとサタンの落とし穴にはまってしまう。偶像礼拝から注意深く自分を守りましょう（1ヨハネ5・21）。

3. 偶像礼拝の克服

偶像礼拝は、神が占めるべき位置に他のものが占めていることも言えます。神に代わるものは、富（マタイ6・24）、欲望（ピリピ3・19）等が挙げられます。むさぼりが偶像礼拝なのです（エペソ5・5、コロサイ3・5）。神の代わりをなすもの、神に取って代わるものが、常に私たちの心を占めようとします。

このような「偶像礼拝」の克服の秘訣は、主の再臨を待ち望むことであり、天に心を置くことであると聖書は教えています（マタイ6・19、20、ピリピ3・20、1テサロニケ1・9、10）。

ですから、私たちは、次のダビデの祈りを自分の祈りとし、心の王座にいつも主に座していただくものでありたいと思います。

「主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。」（詩篇八六篇一一節）